

2010年6月

法科大学院統一適性試験

第3部 長文読解力を測る問題

《タイムスケジュール》

15:00 「長文読解力を測る問題」の試験開始
15:40 「長文読解力を測る問題」の試験終了

《注意事項》

1. 受験にあたっての注意

(1) 試験時間中の途中退出の禁止等

各部の試験開始から試験終了（解答用紙の回収時間を含む）までは、解答が終了しても途中退出はできません。

ただし、トイレ・急病等、やむをえない事情で退席される場合は、挙手をして試験監督員の誘導を受けて下さい。

試験終了後は、問題用紙はお持ち帰り下さい（解答用紙は回収します）。

(2) 筆記具等

解答用紙へのマークは、HBまたはBの黒鉛筆を使用して下さい。その他の筆記具（HB・B以外、シャープペンシル等）を使用した場合、採点機械で読みとることができず、無答と判断されることがあります。

試験時間中、机の上に置いておけるものは、受験票、鉛筆、消しゴム、手動の鉛筆削り、腕時計、腕時計に準じるサイズの置き時計、眼鏡だけです。その他の物（筆箱、眼鏡ケース等）はカバン等に入れて下さい。

マーカー、定規、ボールペン、耳せん、ストップウォッチ等の補助具は使用できません。

(3) 解答方法

マークは、各問題につき1つのみマークして下さい（2つ以上マークすると無効になります）。

誤ってマークした場合は、跡が残らないようにきれいに消しゴムで消して下さい。

解答用紙は折り曲げたり汚したりしないで下さい。

(4) 棄権・欠席

試験を棄権する場合、挙手をして試験監督員の誘導を受けて下さい（その場合、問題用紙と解答用紙は回収します）。

本適性試験は、4種類（第1部～第4部）すべての試験に解答が義務づけられていますので、このうち1つでも棄権・欠席すると、すべての試験につき、採点がなされません。

2. 不正行為・迷惑行為の禁止

以下の行為があった場合、「失格」とし、その時点以降の受験をお断りします。また、すでに受験した部分についても無効とし、採点は行いません。次年度以降の受験もお断りします。

なお、法科大学院に対して当該受験者が「失格」となった旨、報告することがあります。

- ① 試験中に、他人に援助を与えたり、他人から援助を受けた場合
- ② 他人に代わって試験を受けた場合
- ③ 他人に対する迷惑行為を行った場合
- ④ 試験監督員の指示に従わなかった場合
- ⑤ その他不正行為を行った場合

3. その他

本試験において利用した著作物のうち、問題作成の都合上必要があるものについては、修正を加えています。

適性試験委員会
財団法人 日弁連法務研究財団
社団法人 商事法務研究会

試験問題は次頁から

【長文読解力を測る問題】

以下の問題1～4は、文章およびそれに基づき出題された小問からなっている。文章に記述または含意されている事柄に基づいて、各小問に解答しなさい。

問題1

ストレスがたまっているんじゃない？

ストレスで胃が痛いのか？

ストレス解消法は何かある？

会話でこんな話題が当たり前になるほど、ストレスという言葉は私たちの日常生活のなかにとけこんでいる。だが、現在使われている意味でのストレスという用語は、ウィーン生まれのハンガリー人生理学者ハンス・セリエによって1930年代に使われ始めたもので、歴史の新しい言葉だ。

それ以前の（いまでも工学の分野ではそうなのだが）「ストレス」という言葉の意味とは、たんに外界からの力や圧力の作用（とくに過剰な場合）のことを指しているにすぎない。その一方、ストレスを受けた物体のなかに生じる歪みはストレーンと呼ばれている。こんにちのストレスは、人間の心身にたまったり、上腹部痛を引き起こしたり、本人の努力で解消できるのだから、どちらかというとなら工学的な意味でのストレーンの方に近い。

一方、生物学でのストレス理論においては、ストレッサーは外界から加わる生物や生体への刺激を表しており、ストレスは、ストレッサーによって引き起こされるあるいはそれに抵抗する生物の側の反応を指している。つまり、ストレスという言葉の意味は、（①）では外界からの影響であって、（②）では外界からの刺激に対する反応を指しているという点で逆転してしまっている。したがって、（③）でのストレスとストレーン（外界からの力と力を受けた対象物の反応）という二分法は、セリエ（および④）の用語法ではねじれて、ストレッサーとストレスの二分法となっている。

ちなみに、セリエは、英語が母国語ではなく、自分はストレスという言葉の意味に疎かったのだと、のちに自伝で述べている。しかし、外界からの影響と内部からの抵抗の両義性は、たんに言葉の問題というよりも、ストレスという概念が本質的にはらんでいるあいまいさを見なすべきだろう。こんにちの日常的な用語法では、ストレスとストレッサーを分けることはほとんど行われなからだ。このことは、人間のストレスという文脈でいえば、社会環境と人間との相互作用としてのストレスを考えると、社会環境が個人に与える影響を重視するか、それを個人がどう受けとめるかを重視するかという問題に関わっている。ストレスにおける環境と個人という問題設定のもつ政治性は後で詳しく論じるとして、

まずはセリエのストレス概念をもう少し詳しく見ていくことにしよう。

彼は、ストレスを「生物組織内に非特異的に誘起された、あらゆる変化からなる特異な症候群の示す状態」と定義している。これは何ともあいまいな定義である。ここで、こんにちの日常言語でのストレス概念とのズレという面で注目すべき点は、セリエのいうストレスは、その結果の善し悪しにかかわらず、ストレスラーに対する生体の反応をすべて指し示す言葉であって、マイナス面だけでなくプラス面もまた含んでいるところだ。この両面は、セリエにおいては、有害ストレス（ディストレス）と快ストレス（ユーストレス）と名付けられていたのだが、こんにちのストレスという言葉の意味はほぼ前者の有害ストレスだけに限られている。

(中略)

セリエのいうストレスは身体的な変化（とくに副腎皮質ホルモン）に力点が置かれていたのに対して、こんにちのストレス概念は、身体的な病気や不調という結果を引き起こす可能性があるにせよ、それ自体としては心理的・精神的な何ものかと考えられている。この点は、セリエのもとのストレス概念とこんにちのストレスとの違いの第2の特徴だ。ストレス概念における精神と身体二元論に注目することは、ストレスの政治学を考察する上で最初の一步となるだろう。

(中略)

セリエ自身は、こうした心理的な意味でのストレスは、彼自身のストレス概念とは異なっていることをしばしば指摘していた。神経系がない原始的な生物や、細胞についてもストレスやストレスラーが存在しているからだ。ストレスの原因となるストレスラーが、外界からの脅威として認知されることで「情動的な覚醒」を生体に引き起こすという心理学重視の考え方は、ただ「心理的ストレス」にだけ当てはまるに過ぎないというのである。彼と同様に、生物学者たちは現在でも、ストレスという言葉を経済系のない下等生物や培養された細胞を使った実験の場合に用いている。心理的でない意味でのストレスは、日常言語でも使われる場合があり、「細胞への酸化ストレスをコエンザイムQ10が防止する」といった健康食品や化粧品の宣伝文句にも現れている。試験管のなかの細胞の周囲の環境を変化させることで、その細胞にストレスを与えることはできるが、細胞には神経系はないし、おそらく精神もないので、ストレスを認識することはできないだろう。

1936年のセリエの論文も、人間のストレスを直接に扱っているわけではなく、ラットでの動物実験の成果をまとめた研究を報告している。そこで使われた有害作用因は、寒冷刺激、外科的傷害、脊髄損傷、過剰な運動、各種の薬物、などが挙げられている。これらは身体的な（⑤）であって、ラットがその刺激を認知したかどうかはもちろん論じられていない。その後、彼が心理的ストレスの動物実験での（⑥）として使ったのは、

(無断転載を禁止します)

ラットの行動拘束だった。つまり、四肢を完全に固定されることによって自由に動けなくなったという「欲求不満」が、人間での心理的ストレスと同じものとみなされたのだ。

(中略)

この意味でのストレスの心理学化は、ストレッサーを客観的に数字として表現しようという傾向を生み出すと同時に、ストレスを認識する個人の心の反応を定量化しようという研究方向をも作り出した。なぜなら、ストレッサーを数字データで定量化しようとするほど、その限界、すなわち、同じストレッサーであってもその個人に病気を引き起こす場合とそうでない場合があるのはなぜかという問題が表れてくるのを避けることができないからだ。

ストレスを、外界の変化そのものというよりも、その変化が自分のコントロールの範囲を超えてしまったという「認識」であると考え、つまり心理的ストレスと同じ意味であると理解することには、行動主義的心理学とは異なった価値観が暗黙のうちに含まれている。それは、ストレスを、客観的な環境の変化による刺激という事実としてみるよりも、それに対する主観的な認知の意味付けとしてとらえようとする思考方法である。

(中略)

いいかえれば、ストレスという環境の変化を有害なものとするかどうかは、そのストレスをどのような文脈のなかで受け取るか、つまり「認知」の問題によって左右されるということになるだろう。この認知心理学的な実験解釈は、物理学をモデルとした行動主義的心理学による機械論的な説明とは異なっているものの、個人の能力や心を重視する個人主義的な価値観とは合致しているため、近代社会では受け入れられやすい思考法ではある。その結果、有害と有益というもとのセリエによるストレスの二分類（有害ストレスと快ストレス）は、ストレッサーの量やその持続時間という外界の問題から、個人の心や性格のパターン分類という個人内部の問題へと移し変えられることになる。つまり、ストレスを重圧とじて健康に有害な結果を生み出しやすい性格と、ストレスにタフで柔軟に適応する性格とがあるということだ。

(中略)

心理学的な意味でのストレスという概念は、状況がコントロールできないということを経験したときの無力感のことを指している。しかし、病気や障害はしばしば、病因不明であったり、感染症であったり、交通事故や災害であったり、本人自身がコントロールできない原因から生じることが多い。だが、ストレスという言葉をあやつる現代の道徳主義者たちは、コントロールできないという認識をストレスとして強調し、それこそが病気を悪化させていると主張する。こうした自分自身が病気に責任があるという考え方は、確かに

無力感は取り除いてくれるかもしれない。だが、そのかわりに別の重荷、罪責感を病気で苦しむ人々の肩の上に乗せてしまうのではないだろうか。そこには、さらに、人間は心のもち方次第で、何でもコントロールできるはずなのに、それをしようとしないうち自身こそ病気の責任があるのだという非難が暗黙のうちに加わっている。

(美馬達哉『〈病〉のスペクタクル』(人文書院)より)

(1) 以下のうち、(①) ~ (④) に入るべきものの組み合わせとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ①生物学 ②工学 ③工学 ④生物学
2. ①心理学 ②工学 ③生物学 ④工学
3. ①工学 ②生物学 ③心理学 ④生物学
4. ①工学 ②生物学 ③工学 ④生物学
5. ①工学 ②生物学 ③工学 ④工学

(2) 以下のうち、(⑤) (⑥) に入るべきものの組み合わせとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ⑤心理的ストレス ⑥ストレッサー
2. ⑤ストレッサー ⑥ストレッサー
3. ⑤ストレーン ⑥ストレーン
4. ⑤ユーストレス ⑥ディストレス
5. ⑤ストレッサー ⑥ストレーン

(3) 以下のうち、ストレスの定義に関する著者の説明として、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. セリエの定義は、非常にあいまいであり、日常的な用語法とも大きくズレてしまっているため、是正されるべきである。
2. セリエの定義と日常的な用語法との間にズレが生じたのは、セリエが英語を母国語としていなかったことが、主たる原因である。
3. セリエが、ストレスという語の定義に、良い結果をもたらすものも含めたのは、生物学に強い影響を受けたからである。
4. ストレスという語は、日常的にはセリエの定義とは異なり心理的・精神的な側面に注目して使われることが多い。
5. セリエの定義以降は、ストレスという語は、外界からの影響ではなく、もっぱら内部からの抵抗の観点から用いられるようになった。

(無断転載を禁止します)

(4) 以下のうち、セリエのストレス研究に関する著者の考えとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. セリエは、行動主義的心理学の影響を受け、ストレス研究を行った。
2. セリエは、プラス面も含むストレス概念を用いたために、人間の心理ストレスについての研究を行うことはできなかった。
3. セリエは、人間の身体的な変化に着目し、心理的ストレスの性質を明らかにしようとした。
4. セリエは、ストレスに関する研究において、外からの影響ではなく、身体的な変化に力点を置いたことにより、ストレス概念の心理学化への道を拓いた。
5. セリエは、身体的な変化に力点をおくことにより、人間を直接の対象としてストレスに関する実験を行うことができた。

(5) 以下のうち、ストレスの心理学化に関する著者の主張として、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ストレスの心理学化により、機械論的思考方法に基づくストレス研究は、人間のストレス研究としては不適切であると明らかになった。
2. ストレスの心理学化により、人間のストレスを外界の変化による刺激という事実ではなく、主観的な認知の意味づけとしてとらえるようになった。
3. ストレスの心理学化により、「認知」へ着目したストレス研究は、近代社会の個人主義的な側面とは相いれない方向に展開した。
4. ストレスの心理学化は、ストレスを客観的に数字として定量化することへの批判を可能にした。
5. ストレスの心理学化により、ストレス研究は、機械論的思考法をとりつつも、人間の心を解明する画期的な研究となった。

- (6) 以下のうち、著者の考えとして、最も適切なものを1つ選びなさい。
1. ストレスという概念は、学問分野ごとに異なる内容をもっており、統一をはかるべきである。
 2. ストレスの政治学について考察する上では、ストレス概念に有益なものとは有害なものが含まれていることが非常に重要である。
 3. ストレスという語のあいまいさは、単に日常的な用法と学術的用法との違いや、学問分野間での違いだけに還元できない問題点をはらんでいる。
 4. 人間のストレスに関する研究は、ストレスに強い人間の性格を涵養するために重要であり、推進されるべきである。
 5. 機械論的思考法に基づく人間のストレス研究は、ストレスの政治学の観点から、非常に危険である。

問題 2

私は十数年間、毎年つづけて、千匹から2千匹ほどのハゼ（正確によぶとマハゼ）に、ビニールの札を頬のところにつけて、東京湾のほうほうに放すことをやった。もちろん学生も含めた教室の人達の努力もさりながら、はじめは何とかかんとかいった釣り人たちも、わずかな賞金であるにかかわらず、とれた時と所を知らせて届けて下さったお蔭で、東京湾のハゼについていろいろとわかった。むずかしくいうと、これを標識放流といっている。鳥などの渡り^{わた}をしらべるのと似たことである。

これでわかったことの1つに、(①)。だから、今のところ隅田川系統の江戸前、多摩川系統の羽田、大森、江戸川系統の三枚洲などのように、淡水と海水との境目にすむハゼは、1つ1つの川ごとの集団になっていると考えている。冬に底の泥の中に産みつけられた卵が春にかえり、かえったばかりの稚魚は遊泳力が少なくて、いくばくもなく腹ビレが吸盤となって砂底についた生活をはじめ。幼いハゼは浅い岸辺で、アミなどを食べて育つが、半年たった秋には、もうその年生まれの通称デキが、釣りにかかる。成長も早い、1腹で1万粒もの卵をもち、雄が穴の中で保護して育てるから、卵からかえる率も高い。夏から秋にかけては、水さえ悪くならなければ、たいへんな数のハゼが海の底にいる。

赤札つきのハゼを放す実験のもう1つの目的は、あんなにたくさん釣って、釣りすぎではなからうか。釣り尽してしまうのではなからうか。いったいハゼはどれほど海にいるだろうか。こういう疑問にこたえるためである。つまり、釣獲率を知るためである。

そのためには、赤札をつけたハゼを釣った方は必ず報告して頂く必要がある。また一方、どれだけ釣れているかを知る必要がある。そのため船宿にたのんで、釣りに出た人の1日に釣った魚の数、出た釣り人の数をしらべてもらう。ハゼ釣りは秋の彼岸が中心で、東京湾に出る人は、船だけでも年に延べ百万人あった（昭和30年から40年頃まで）。岡ッ張^{おか ぼり}はさらにたいへんな数である。正確に数を知るにはヘリコプターか軽飛行機で空からかぞえるのが一番いい。金がかかるのでこれはそうたびたびはできないから、船宿からの報告がもとなる。

こういう数字がもとで、ごく簡単にその漁場の範囲にいるハゼの数をすることができる。それは次のような関係があるからである。

$$\text{釣獲率} = \frac{\text{釣られた魚の数}}{\text{その海にいる魚の数}} = \frac{\text{釣られた赤札つきのハゼの数}}{\text{放した赤札つきのハゼの数}}$$

このうち、赤札つきのハゼについては、放した数はわかっているし、その後、釣られたものの報告されたのはわかっている。また、その間に釣られたふつうのハゼの総数も調べたから、海にいるハゼの総数もわかる。これらの比が釣獲率になるわけである。

ただし、こういう関係が成立するためには、いろいろ考えなくてはならないことがある。赤い札のついたハゼを放すときに、(②)。なるべく海にいるのとまざるように、それ

がいると思われる範囲にばらまかなくてはならない。

これは碁石入れの中の碁石の数をすべてかぞえなくても、この中にもし白があるとすれば、黒の石をたとえば (③) 入れてよく振ってかきまぜる。そして目をつぶって一握りの石をつかみ出し、その中にある (④) , 碁石入れの中にあつたおよその白い石の総数がわかる、というやり方と同じ趣向である。

ビニールの赤札も、つけ方がよくないと落ちることもある。札がついているために他の魚によけいに食べられたり、傷のために死んだりすることもあるかもしれない。こういう率を知るためには、札をつけたのとつけないのとたくさん水族館の中に飼ってみて比較した。こういうことは、さきに述べた関係が成り立つ条件として、しらべておく必要もある。

いったん釣られてイタイ思いをしたはずのハゼを、薬で麻酔させて、頬に穴をあけて札をつけ、きれいな水に入れて麻酔からさめて泳ぎ出すと、すぐ海に放つてやる。ところが、何分もたたないのに、その船の後からついてきた船の釣り人に釣られてしまったこともあった。

ともかく、赤札をつけられても、すぐその日から釣られてしまう。9月の中頃あたりに放すのだが、日曜や祭日には多く、ふだんの日には少く釣れ、報告はどんどんとくる。しかし、日のたつのにしたがって減り、1カ月、2カ月たつとだんだん少くなる。これは、寒くなると出る釣り人の数もへるので、釣り人の数に比例するということもあるし、1人1日に釣る魚の数も、秋から冬へとへっていく。一方、魚は成長によって大きくなり、12月にもなれば産卵の支度の真子(卵巣)や白子(精巣)が大きくなる。

こうして知った釣獲率は、昭和30年から40年の10年間は、ほとんど5パーセント、つまり100匹のうち5匹がつれているにすぎなかった。それが、41、42年と埋立てがすすむにしたがい、20パーセントから30パーセントにもハネ上った。その頃大漁をしたので、釣り人は、ハゼはよくワイタと思った。船頭までもそういったし、新聞や釣り雑誌にもそういう記事もでた。

しかし、それは埋立てですむ海を失ったハゼが、せまいところに寄つたので(いいかえると魚の密度が高くなったので)釣獲率がハネ上り、どんどん釣れ、海にいるハゼの数はどんどんへってしまっただけの話であった。そのまえから、埋立ての話をきいて、声をかぎりに危機を叫んでいた私たちに対して、昭和43年秋にグッと釣れ方がへつたときになって、はじめて私たちの考え方が正しかったのがわかったような態度を示した人が少なかった。釣獲率という概念がわからず、たくさん釣れればよくて、海にどれだけ魚がいるのかには関心をもっていなかった人たちである。

釣りは釣れば楽しいものである。釣り人は釣りを楽しめばいいので、釣獲率とか密度とか、面倒なことは科学者にまかしておけばいいことかもしれない。しかし、科学者は釣り人から情報をえないと、どうにもならない。釣り人もまた、人類をめぐる自然界の因果関係を、考えてみようと努力さえすれば立派な科学者といえる。いや、釣り人こそ、水界

(無断転載を禁止します)

や魚についての知識をもたらしてくれる人である。⑤ただ、天狗や尾ビレのついた話はたくさんだが。この釣れるか釣れないかは、海にいる魚の数とその状態できまるのである。

戦後、昭和25年に、私はアメリカの釣りや漁業の行政を見学に、当時のマッカーサー司令部から派遣された。ものの考え方がいろいろと日本とちがうので驚いたが、その1つは、アメリカの水産局は、漁業より釣りに行政の重点をおいていることだった。(日本の現状は釣りの行政は零に近い)それはアメリカの漁業は日本の何分の一の規模だし、釣り人口は1千万をこえるということもあるのだが、とにかく釣り人が魚の繁殖についてウルサイ。釣りに行って釣れないと、州政府に文句をいう。もっとも1日10ドルや20ドル(州によって金額はちがう)も入漁料をとられるから、文句をいうのは無理はないが、その文句が科学的なのである。

カリフォルニア州の海岸には、日本でいえばヒラメというくらいの、1メートルちかいバスタード・ハリバット(カリフォルニア・ハリバットともいう)というのが釣れる。これは、なかなかたのしい釣り魚である。そこの釣り人にあつたら、『魚の平均釣獲量が、去年は0.5匹人日だったのが、今年は0.3匹人日に下ったから、政府に文句をいっている。あなたは原因が何だと思うか?』ときく。

平均釣獲量とか、匹人日などという単位は、日本ではその当時は科学者のあいだでも知っている人は少かったので、私はその花屋のオヤジさんの顔をあきれて見つめた。

これはこういうことである。(⑥)その原因を窮明きゅうめいすることは、税金で給料をもらっている政府の科学者が当然すべきであるという考えである。

※岡ッ張おか ばり=船に乗らず海岸等から釣りをする人たち

(檜山義夫『釣りの科学』(岩波書店)より)

(1) 以下のうち、本文の趣旨からして、(①)に入るべきものとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ハゼには川の上流にもどる習性があるということがある
2. ハゼがあまり長生きしないということがある
3. ハゼの移動があまりないということがある
4. ハゼの数があまり多くないということがある
5. ハゼはきれいな水を好んで成長するということがある

(2) 以下のうち、本文の趣旨からして、(②)に入るべきものとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. なるべく岸から離れたところに放さなくてはならない
2. 釣り船のこないところに放さなくてはならない
3. 時間をおいて放さなくてはならない
4. 多く放しすぎたのはいけない
5. まとめて放したのはいけない

(3) 以下のうち、本文の趣旨からして、(③)と(④)に入るべきものの組み合わせとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ③手当たり次第たくさん ④黒の石がどの程度分散するかを見ることによって
2. ③あらかじめ数えた一定数 ④黒の石と白の石の比率を測ることによって
3. ③白い石の何分の一かを ④黒の石と白の石の比率を測ることによって
4. ③適当に一握り ④黒の石と白の石の比率を測ることによって
5. ③適当な数を数えて ④黒の石がどの程度分散するかを見ることによって

(4) 以下のうち、下線部⑤のたとえの内容として、適切でないものを1つ選びなさい。

1. 釣りの道具と腕前の自慢ばかりされるのはごめんだ。
2. 釣りもしない魚の話ばかり聞かされるのはごめんだ。
3. 大きさの不正確な話をされるのはごめんだ。
4. 釣った魚の数を多めに聞かされるのはかなわない。
5. 大きい魚のことばかり言われるのはかなわない。

(無断転載を禁止します)

(5) つぎの文章は、(⑥)に入る文章である。以下のうち、これらを並び替えた正しい順序を示すものを1つ選びなさい。

- a. そして、漁場の面積が一定ならば、これをいつも知っておけばその魚の海にいる数の変遷を知ることができるのである。
- b. サンフランシスコの花屋のオヤジさんは、釣りの「たのしさ」を量ではかることを知り、入漁料を政府に払っているからには、「たのしさ」のへったことには、政府に抗議することが当然と考えたわけである。
- c. 釣り人が釣りに出て、1日かかって釣る魚の匹数を、その場所に出るたくさんの人について1人当りに平均して出した数字を、平均釣獲量という。
- d. そして、この平均釣獲量こそ、釣り人がえられる「たのしさ」の目安になることである。
- e. これは、その漁場における、漁獲の対象となる大きさの魚の密度などに比例する。

1. b - c - d - e - a
2. b - c - e - a - d
3. c - a - e - d - b
4. c - d - e - a - b
5. c - e - a - d - b

(6) 以下のうち、本文の内容と合致しないものを1つ選びなさい。

1. アメリカでは釣り人口が多く、漁業より釣りに行政の重点がおかれる。
2. 釣り人は、科学的な関心などもたずに釣ることのみをたのしめば良い。
3. 釣り人は、大漁になるのはハゼがたくさんいるからだと考えていた。
4. 科学者は、釣獲率のような密度といった視点で海にいる魚の量を考える。
5. 埋め立てにより釣獲率が上がったのは、魚の密度が上がったからだ。

問題3

李济が山西省夏県西陰村で中国の考古学者としてはじめて発掘の鋤をおろしてから70年あまり、夏王朝はようやくそのヴェールを脱ぎはじめた。河南省偃師市に所在する二里头遺跡は夏王朝の最後の都、その6キロ東で発見された偃師城遺跡はそれを攻略した殷湯王の都であることが判明した。伝説の夏王朝は確かに実在したのである。それが明らかになったのは、中国の考古学者のたゆみない努力のたまものにはかならない。

しかし、治水や全土の開拓に功績のあったという禹は実在したのか、禹は夏王朝の最初の王であったのか、王位を世襲する王権が禹・啓より14世17代もつづいたのか、たびたび遷都をくり返した王都のうち、二里头遺跡が最後の「斟尋」であったとしても、そのほかの「陽城」「商丘」「斟灌」「原」「老丘」「西河」はどこにあったのか、そして夏王朝のはじまりは考古学文化や暦年代のいつにあたるのか、太康の失政や少康による復興など夏王朝の興亡の記録はどこまで確かなものか、文献史学の関心からすれば、まだまだ未解決の問題が山積している。考古学からみえてきたのは、殷によって滅ぼされた王朝が二里头にあったということにすぎないのである。

二里头遺跡で発見された①夏王朝は、中国の第1王朝と呼ぶにふさわしい、4000年の文明のはじまりを画期づけるものであった。その王朝と文明を特徴づけるものこそ「礼制」にかならない。社会を秩序づける規範としての「礼制」は、夏王朝にはじまり、殷周時代に整えられ、戦国から前漢代に儒教経典の礼書としてまとめられた。そして儒教の国教化にともなって「礼制」はラスト・エンペラーの時代まで歴代の王朝に受け継がれていったのである。

(中略)

二里头遺跡の中心には、街路で整然と区画された宮殿区があった。発掘された1号宮殿は、回廊で囲まれた中に王が臨朝する巨大な正殿と多数の臣下を収容できる中庭からなり、西周金文や儒教経典にみえる宮殿、ひいては漢代から明清代にいたる宮殿と基本的に同じ構造をもっている。それは「王者のまつり」をおこない、王が臣下に謁見し、君臣関係を目にみえる形で表象する、宮廷儀礼の場であった。1号宮殿の南では、朝廷での饗宴を準備する大がかりな厨房が発見されている。王が臣下をもてなす饗宴も宮廷における重要な儀礼の1つであった。

その宮廷儀礼に用いられた礼器が「玉圭」で、二里头文化の玉璋・玉斧・玉刀・玉戈などの大型有刃玉器がそれにあたる。「玉圭」は貴族としての権威を表象し、宮廷での君臣関係を秩序づけるものであり、宮廷儀礼の整備にともない、神まつりに用いる祭玉から貴族と貴族との社交儀礼に用いる瑞玉が創出されたのである。この「玉圭」はのちに衣冠束帯の貴族が朝廷で所持すべき「笏」となり、わが国の古代王朝にもその制度が受容されていった。

(無断転載を禁止します)

「礼」の本字「禮」は「醴(酒)」を用いた儀式のこと。宮廷儀礼には必ずといってよほど飲酒儀礼がともなっており、それが成立したのは二里头文化であった。酒を温めて注ぐ3足の盃・鬯・爵、酒杯としての觚、酒甕としての大口尊が出現し、そのまま殷周時代に継承されていった。とりわけ爵は非対称の特異な形の原則が西周時代まで1000年以上も一貫して遵守され、その持ち方や酒の注ぎ方など、こと細かな礼儀作法があったことをうかがわせる。

大型の1号宮殿、瑞玉の「玉圭」、銅爵を主とする銅酒器が出現したのは二里头3期である。それはその時期に宮廷儀礼、ひいては「礼制」を整えた王朝の成立をものがたる。銅爵や瑞玉を副葬する墓が出現したのも二里头3期で、貴族の身分秩序が生まれたことを示している。土器の酒器がでそろったのは二里头1期、版築基壇をもつ宮殿、祭玉の柄形玉器、装身具としての銅牌・銅鈴が出現するのは二里头2期であり、二里头文化の最初から王朝の形成に向けた助走がはじまっていたのはもちろんだが、中国文明を特徴づける宮廷儀礼を整えた王朝は二里头3期に成立した。それが夏王朝である。夏王朝の都が最初から最後までずっと二里头遺跡にあったのかどうかはわからない。しかし、考古学からみたとき、二里头において王朝の体制が整ったのは二里头3期で、二里头4期までの100年足らずが王朝の存続期間であったことは確かであろう。

二里头3期にはまた、銅武器の出現、遠射用武器の鏃の爆発的な増加、暴力的に殺害された犠牲者の急増などがみられた。集団どうしの戦いが激しくなったのである。山西省東下馮遺跡でも同じ現象が確かめられ、二里头3期中原の広い範囲で大規模な戦いが頻発するようになったことがわかる。それは(②)を示している。

禹の伝説のような大規模な治水工事はなかったとはいえ、王都や宮殿の建設には多数の労働者がかりだされた。1号宮殿の基壇をつくるだけで、のべ20万人をこえる労働者が動員された。そのほかの土木・建築工事、さまざまな手工業生産、対外戦争などには、もっと多くの人びとが恒常的に使役されたのだろう。それは王都の住民だけではまかないきれないため、周辺の集落から広く徴用された。労働者に提供する食糧も領域の広い範囲から徴収された。それまでゆるやかな紐帯で結ばれていた二里头文化の諸集団は、王朝を中心に労働力と物資の両面で組織化されていったのである。そして王朝の内部でも多数の労働者や兵士を指揮し、大量の食糧を管理する役人の権限がますます拡大していった。

龍山時代にも大がかりな集団労働があった。しかし、270ヘクタールの城郭をもつ山西省陶寺遺跡のほあいでも、城郭は一般の庶民をも守るものであり、多数の副葬品をもつ大型墓と副葬品のない小型墓とは城郭内の同じ共同墓地に営まれていた。その集団労働は身分のちがいをこえた共同性にもとづいていた。ところが、二里头遺跡のそれは一握りの為政者を満足させるため、多くの庶民が搾取されるようになったところにちがいがある。共同体からますます乖離していった機構が、中国で最初に成立した王朝のもう1つの実像であった。

前3千年紀から気候の寒冷化と乾燥化が徐々に進行していたが、庶民の生活には大きな変化はみられなかった。農業はアワ・キビを主とする雑穀にムギ・イネ・ダイズを組み合わせた輪作をおこなっていた。ムギは西方から、イネは南方から伝わった作物であり、五穀がでそろった。農村ではブタを主とする小規模な畜産をおこない、近くの森林ではシカ類をおもに狩猟し、河川や沼沢では漁撈をおこなっていた。この生業形態も河南龍山文化のときからほとんど変わっていない。

河南龍山文化から二里頭文化へと、煮炊き用の罐形土器が平底のものから丸底のものに変化し、それにともなって煮炊きの場が住居中央の炉から壁ぎわの竈に転換した。土器を焼く窯の構造も進化した。しかし、日常の調理や盛りつけに用いる土器は種類に変化がなかったし、土器の生産も小規模な個別経営のままであった。土器で大きく変化したのは、飲酒儀礼に用いる酒器が出現したことであるが、それを用いたのは一部の貴族だけで、庶民の生活とは関係のないものであった。

このようにみると、二里頭文化における王朝の成立は、征服戦争による支配・従属関係の成立、生産力の発展、庶民生活の変化によるものではなく、一部の有力者が自分たちの権益を維持する装置として宮廷儀礼を創出したところに起因するのであろう。そして為政者となった貴族たちは庶民をさまざまな労役にかりだし、国家の権力基盤がしだいに確立していったのであろう。

二里頭文化の領域は、王都の二里頭遺跡を中心とする半径100キロほどの範囲にすぎなかった。王朝の建設される二里頭3期に少しずつ拡大に向かったとはいえ、それは河南龍山文化の王湾類型の分布圏を大きくこえるものではなく、夏王朝は勢力拡大にあまり積極的でなかったと考えられる。そのかわり高度に発達した王朝文化は、周辺地域に強い影響をおよぼした。龍山時代の各地に並立した高い文化とその交流ネットワークは前3千年紀末までに瓦解し、いちやく王朝の形成をなしとげた二里頭文化から放射的に文化が発信されるシステムに転換したのである。

夏王朝の宮廷儀礼を継承しながら、国家の支配体制をいっそう確立させたのが殷王朝である。二里岡文化になると、罐から鬲へと煮炊き用の土器が転換し、いちじるしく小型化する。播り鉢が消失し、盛りつけに用いる食器の種類も大きく変化した。肉を火にあぶって食べることもなくなった。王都では土器の集中的な生産がはじまった。殷王朝の成立は強制力をともなって庶民の日常生活に大きな影響をおよぼすことになったのである。

農村での生業には大きな変化はなかったが、殷王朝ではウシやヒツジ、やや遅れてウマの組織的な牧畜を開始し、骨を用いた占いや王室祭祀の犠牲としてそれを大量に消費した。ウマは王朝の軍備と貴族の威信をあらわすのに不可欠のものとなり、郊外における大規模な牧場経営と王都におけるウシを主とした大量消費は、もっぱらブタを自給自足していた庶民との格差をきわだたせるのに十分であった。

独自に宮廷儀礼を整えることによって成立した夏王朝とちがって、殷王朝は夏王朝を征

(無断転載を禁止します)

服して成立したことから、貴族を統合する装置として夏王朝の宮廷儀礼をとりいれたほかに、被征服民を統治する国家体制を強化していった。庶民の日常土器に大きな変化をもたらし、土器や家畜の国家的な生産体制を組織したのは、そのあらわれであろう。また、夏王朝の文化領域をこえて殷王朝は支配領域を飛躍的に拡大させることになったのも、征服王朝としての体制に由来するのであろう。殷王朝は王都に巨大な城郭を築いただけでなく、山西や湖北の前線にも小さな城郭を設置し、地域支配の拠点としたのである。要するに、夏王朝は王朝の形を整え、殷王朝は国家の統治体制をつくりだしたのであった。

(岡村秀典『夏王朝』(講談社)より)

(1) 以下のうち、下線部①の理由として、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 大きな宮殿が発掘されたから
2. 民衆を支配する統治体制を整えたから
3. 「禹」や「啓」といった伝説が生まれたから
4. 儒教が始まったから
5. 宮廷儀礼が整えられたから

(2) 以下のうち、(②)に入るべきものとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 戦争の結果として支配と従属の関係、ひいては王朝の体制が生みだされたのではなく、王朝の成立にともなって社会の緊張が高まってきたこと
2. 王朝の成立にともなって支配と従属の関係が固定化し、それがますます王朝の体制を強固なものとしたこと
3. 戦争の結果として支配と従属の関係が生まれ、それが王朝の体制を生み出すことにつながったこと
4. 王朝の成立にともなって社会の緊張が高まってきたのではなく、戦争の結果として支配と従属の関係が固定化してきたこと
5. 王朝の成立にもかかわらず、治水事業の伝説が生まれたように、為政者が民衆の利益を優先して政治をおこなったこと

(3) 夏王朝の庶民の暮らしは何を目的として記述されているのか。以下のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 気候変動による影響を受けて、生活形態が変わったことが歴史に影響していることを示すため
2. 庶民の暮らしはほとんど変化がないので、王朝の誕生は民衆に無縁のことであったことを示すため
3. 宮廷儀礼が整えられたことによって、庶民の日常生活にも影響があったことを示すため
4. 庶民の暮らしの変化が原因の1つとなって王朝の成立がもたらされたわけではないことを示すため
5. 庶民の間でブタの自給自足をしていたのは夏王朝の後も変わらなかったことを示すため

(4) 以下のうち、殷周時代に継承されなかったものを1つ選びなさい。

1. 大規模な治水事業
2. 正殿の中庭からなる宮殿
3. 玉の利用
4. 飲酒をともなう儀礼
5. 国家権力による庶民の搾取

(5) 以下のうち、夏王朝と比較した殷王朝の特徴を説明したものとして、適切でないものを1つ選びなさい。

1. 支配領域が飛躍的に拡大されたこと
2. 被征服民を統治する国家体制を強化していったこと
3. 宮廷儀礼を支配の道具として活用したこと
4. ウシやヒツジ、ウマの組織的な牧畜をしたこと
5. 煮炊き用の土器がいちじるしく小型であったこと

(無断転載を禁止します)

(6) 以下のうち、夏王朝の特徴として本文の趣旨に合致しないものの組み合わせを1つ選びなさい。

- ア. 二里头遺跡を中心とする狭い範囲で成立していたこと
- イ. 高い水準の文化を武器に、周辺の部族を従えていったこと
- ウ. 二里岡文化と呼ばれる王朝に移行し、強力なものとなったこと
- エ. 独自に宮廷儀礼を整えることによって成立したこと
- オ. 城郭は一般の庶民をも守るものとして大がかりな集団労働で作られたこと

1. アイウ 2. アイエ 3. アエオ 4. イウオ 5. イエオ

問題 4

「目的」とは何か。あとでわかることだが、それは実は「衝動」(appetitus)にほかならない。

われわれをしてあることをなさしめる目的なるものを私は衝動と解する。(『エチカ』第4部定義7)

ふつうわれわれは、目的がまずあってその達成に努力する、というふうを考える。努力は義務のように見える。ところがスピノザは『エチカ』で、こういう文法を逆転させる。まず衝動がある。そしてこの衝動に駆られるからこそ、われわれは自分が目的に向かっていているのだと思ひ込む。

われわれはあるものを善と判断するがゆえにそのものへと努力し・意志し・衝動を抱き・欲望するのではなくて、反対に、あるものへ努力し・意志し・衝動を抱き・欲望するがゆえにそのものを善と判断するのである。(『エチカ』第3部定理9の備考)

詳細はあとでゆっくり見ることにして、ここではこの逆転の意味を考えよう。一見奇妙に見えるかもしれないが、実はそうでもない。われわれが目的を問う場面を考えてみればわかる。

たとえば、ホームに向かって歩いている人にその目的を聞いてみる。なぜホームへ？ 「あたりまえでしょう、電車に乗るため」。なぜ電車に？ 「これから出勤なんですよ」。どうしてご出勤を？ 「だって月給取りだからしかたないでしょう」。なぜ給料を？ 「生活のためにきまっているじゃないですか」。ではなぜ生活を？ 「なぜって……」。

こうして、さしあたりの「目的」は問いただしてみると実際には何かもっと基礎的な目的のための手段であり、この基礎的な目的もまた、さらにもっと基礎的な目的の手段であり……というふうに遡行してゆき、その最後には、もはや言い表せない「衝動」があることがわかる。言いがたい衝動に駆られてその人はいまホームに向かいつつある。その衝動が、さしあたりの目的を根っこで支えている当のものなのだ。それゆえ、「目的」とは実のところ衝動なのである。

ふつうわれわれは、自分で目的を立て自分の自由な意志で行動していると信じている。ところがスピノザによると、自然の中で起こっているのはその逆である。言い表すことのできない衝動がすでにあってわれわれの行動を生み出しており、われわれはそれをいわば遅ればせに欲望として感じている。そして問われると、この欲望意識をもとに、自分しかじかの目的に向かって自由な意志で行動しているのだと解釈し、自分にも他人にもそういうふうに答えを返すようになっている。

(無断転載を禁止します)

とすると、われわれの意識はすべてをあべこべに表象している可能性がある。『エチカ』の理論でいくと、人間は自分の意欲および衝動を意識しているが、そのように駆る原因は知らない。それで人間は自分を自由な存在だと思ひ、万事を目的のために行うと表象する(『エチカ』第1部付録)。そしてこの衝動こそ、われわれを刻々と肯定し、われわれをわれわれ自身にしている何か、すなわち、われわれの現実的本質にほかならない。説明はあとにして、いまは『エチカ』の次のくだりを眺めておこう。

おのおのの事物が自己の有に固執しようと努める力はその事物の現実的本質にほかならない。(『エチカ』第3部定理7)

この努力は精神だけに関係付けられるときには「意志」(voluntas)と呼ばれ、精神と身体の両方に同時に関係付けられるときには「衝動」(appetitus)と呼ばれる。したがって衝動とは人間の本質そのものにほかならず、この衝動の本性から人間自身の保存維持に役立つ一切が必然的に出てくるのである。次に衝動と「欲望」(cupiditas)の相違はと言えば、欲望はたいていの場合、自分の衝動を意識している限りにおける人間に関係付けられる。この点を除けば違いは何もない。それゆえ「欲望とは(①)」と定義できる。というわけで、これらすべてからわかるように、われわれはあるものを善と判断するがゆえにそのものへと努力し・意志し・衝動を抱き・欲望するのではなくて、反対に、あるものへ努力し・意志し・衝動を抱き・欲望するがゆえにそのものを[……。](『エチカ』第3部定理9の備考)

└─A

↓
目的とは衝動のことである。しかしここで大事なのは、「目的とは衝動のこと」とは言えても、逆に「衝動とは目的のこと」とは言えない、ということである。この非対称性は大変重要だ。これを見のがすとスピノザの言っていることは単なる欲望至上主義と変わらなくなる。

まず、スピノザの言う「衝動」は、それ自体としては目的と何の関係もない。石ころであろうと雨粒であろうと馬であろうと人間であろうと、何かある事物が一定の時間、それでありそれ以外のものでないというふう存在するとき、そのようにおのおのの事物が自己の有に固執しようと努める力、それが「努力」(コナトゥス conatus)と呼ばれるものである(スピノザの大変重要なジャーゴン*なので覚えておこう)。これが無くなるとその事物そのものが無くなるので、それはその事物の「現実的本質」でもある。コナトゥスは目的というものをまったく持たずに働いている自然(神)の活動力の一部であり、そのつど及ぶところまで及んでいる。コナトゥスはそれゆえ、それ自体としては目的と何の関係もない。事物はそのつどめいっぱい自己の有を肯定しているだけで、まだ見ぬ自己の実現を目指して努力しているわけではない。そして、こうした目的なきコナトゥスがわれわれ

にもあって、それが精神に何かをさせ、身体に何かをさせる。これが「衝動」である。だから衝動は何かをさせるわけだが、目的があってそうさせるのではない。

したがって「何々のために」というお題目は、われわれの頭の中にしかない。今一度「欲望」の定義を思い出そう。欲望とは (②)。つまり、それ自身としては目的なき衝動を、われわれは意識の中で何かを実現しようとする欲望として、いわば「誤認しながら生きるわけだ」。馬を餌に向かわせる衝動は餌が目的なのではない。馬自身に対する肯定そのものである。私をホームへと向かわせる衝動はホームが目的なのではない、私自身に対する肯定そのものである。その意味で馬も私も自分の衝動を知らない。衝動はなまの形で意識にのぼることは決してなく、いつも (③) に加工されて経験される。

このように、欲望と目的は同じ文法に属するが、衝動は違う。(④) は (⑤) の言葉では記述できない。われわれの頭の中に (⑥) を存在させているのは (⑦) なのだが、衝動そのものはわれわれの頭の中にあるその目的でわれわれに何かをさせているわけではない。ここには衝動と目的のあいだの乗り越えがたい「ずれ」がある。このギャップはスピノザを理解する決定的な鍵だと私は思う。

さて、こう見てくると、われわれは「目的」について考えを改めねばならなくなる。われわれの欲望はみな、意識を伴った同じ1つの衝動である。とすれば、欲望が欲している善、実現すべき目的なるものは、衝動が付与する欲望の強度として理解できる。すると、ある目的のために欲望を捨てねばならぬという発想はそもそも間違っていて、ほんとうはより強い欲望がより弱い欲望にまさり、より大きい強度の善がより小さい強度の善にまさって前面に出てくるだけの話だということがわかる。したがって問題は、道徳家が言い立てるように、善なる目的のために欲望を断念するという事ではない。とことん欲望に忠実に最大の強度を持った善を的確にマークし、そのまわりに他の諸々の善がおのずと編成されてゆくのを見届けること、これが倫理に求められるすべてである。

↑
B

最大の強度の欲望とは何か。それは、より強い存在になりたい、より完全になりたいという欲望であるとスピノザは考える。自分がより弱く、より不完全になるとわかっていて、そのことをすすんで欲することはできない。どんなにひねくれた考えの人でも、まさにそのひねくれた考えによって自分をさらに強く肯定しようとしている。自分の本性よりもはるかに力強い、そういう完全な本性が何なのか中身がわからなくても、この欲望の真実は曲げられない。

あとでわかるように、事物の世界は自然法則に従って目的も何もしないに生起している。事物は何かの目的に向かって働いているのではないし、完全性に到達するために存在しているのでもない。だから、事物はそれ自身で見られるならよいとも悪いとも言えないし、完全とも不完全とも言えない。その意味で、価値概念はわれわれの頭の中にしか存在しない

(無断転載を禁止します)

い幻想である。とはいえ、われわれは自分の欲望と目的の文法に支配された意識の中にかくまわれていて、その外に立つことはできない。外に出て、自分の衝動がその中で組み込まれて動いている目的なき世界秩序を俯瞰する^{ふかん}ような、そういう位置には立てない。このゆえに、とスピノザは結論する、人間はどのみち「自分の本性よりもはるかに力強いある人間本性」を考えないではいられず、そういう「完全性」へと自らを導く手段を求めるように駆り立てられる。これはまさに衝動がわれわれにさせることであって、目的と手段という枠組みを最初からとっばらうことなどできはしない(『知性改善論』第12, 13段)。

もちろん、むきだしの自然はわれわれを完全性へと向かわせることを目的に存在しているわけではない。ここを間違ってはならない。しかしそれさえ間違わなければ、たとえ事物そのものに備わった価値など幻想であり、価値はたかだかわれわれの欲望に相対的な投影にすぎぬとわかりきっていても、やはり^(b)われわれは価値や目的について語れるし、また語るべきであるとスピノザは考える。われわれは衝動をおのが欲望された目的として生き、それ以外に生き方を知らないのだから。

※ジャーゴン＝専門用語

(上野修『スピノザの世界——神あるいは自然』(講談社)より)

(1) 以下のうち、(①) (②) に入るべき「欲望」の定義として、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 衝動を伴った意識である
2. 意識を伴わない衝動である
3. 衝動を伴わない意識である
4. 人間に関係付けられない衝動である
5. 意識を伴った衝動である

(2) 以下のうち、AからBの間の文章に小見出しをつける場合、適切でないものはいくつあるか。

- ア. 欲望は衝動を知らない
- イ. 目的は衝動の原因である
- ウ. 衝動は目的をもたない
- エ. 主体は自分の衝動を知らない
- オ. 欲望は目的と誤認される

1. 1つ 2. 2つ 3. 3つ 4. 4つ 5. 5つ

(3) 以下のうち、文中の下線部 (a) 中の「誤認」とは何を意味しているのか。最も適切に説明しているものを1つ選びなさい。

1. 意識を伴った欲望を、現実的本質の作用である衝動に起因すると思ひ込むこと
2. 意識を伴った欲望を、目的をもたない自然の活動力の一部であると思ひ込むこと
3. 現実的本質の作用である衝動を、自らの意識的な欲望の促しであると思ひ込むこと
4. 現実的本質の作用である衝動を、目的をもたない自然の活動力の一部であると思ひ込むこと
5. 自らの意識的な欲望の促しである衝動を、現実的本質の反映であると思ひ込むこと

(4) 以下のうち、(③) に入るべきものとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 欲望を伴った目的
2. 目的を伴った欲望
3. 意識を伴わない衝動
4. 衝動を伴わない欲望
5. 目的を伴った衝動

(5) 以下のうち、(④) ~ (⑦) に入るべきものの組み合わせとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. ④目的 ⑤衝動 ⑥衝動 ⑦目的
2. ④衝動 ⑤衝動 ⑥目的 ⑦衝動
3. ④衝動 ⑤目的 ⑥衝動 ⑦目的
4. ④衝動 ⑤目的 ⑥目的 ⑦衝動
5. ④目的 ⑤目的 ⑥目的 ⑦衝動

(6) 以下のうち、下線部 (b) のように結論づけられる理由として、最も適切なものを1つ選びなさい。

1. 目的なき衝動を欲望として誤認し生きるしかないから、人間は価値や目的を語るべきである。
2. 世界は自然法則に従って目的なしに生起しているから、人間は価値や目的を語るべきである。
3. 人間自身の保存維持に役立つために、人間は価値や目的を語るべきである。
4. 自分が自由な存在であると認識するために、人間は価値や目的を語るべきである。
5. 単なる欲望至上主義に陥らないために、人間は価値や目的を語るべきである。

